



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3837 号 2017.8.15 発行

毎日フォーラム・あしたの日本へ ミュージシャン・ミッキー吉野さん

毎日新聞 2017年8月10日



ミッキー吉野さん

音楽を通して表現する楽しさを伝える

音楽を通してハンディを持った人たちや恵まれない子どもたちの力になり、支援を続けているミュージシャンは少なくない。グループサウンズの「ザ・ゴールデン・カップス」や「ゴダイゴ」で活躍したミッキー吉野さんもその一人だ。最近は音楽活動のかたわらダウン症の人たちとバンド活動をしたり、自閉症の人たちのためのイ

ベントに参加するなどしており、「細かいことにまで気を遣って接することが必要。ただ言っているだけではダメ」と主張する。そんな吉野さんに音楽を通じた福祉に対する思いを聞いた。(聞き手・宗岡秀樹)

ーダウン症の人たちとバンド活動をしているそうですね。

吉野さん 青いプラスチックの大きなバケツにガムテープを貼って、それをたたいてパーカッションとして使うサルサガムテープというバンドです。2012年からダウン症の方々と一緒にやっています。この前は、相模原市の津久井やまゆり園事件の犠牲者の追悼の思いを込めてリーダーのかしわ哲さんが作った曲「ワンダフル世界」のレコーディングでキーボードを担当しました。サルサガムテープの活動でやまゆり園追悼ライブなどのイベントやレコーディングなどで参加しています。

ー一緒に活動するきっかけは。

吉野さん 友達から手伝って盛り上げてくれないか、と持ちかけられて、新宿のライブハウスで一緒に演奏したのがきっかけです。その後、何回か演奏しています。スケジュールが空いていればいつでも行きます。13年の日比谷野外音楽堂の90周年イベントの実行委員として、60年代のリバイバルという形で10円コンサートをやったのですが、最初にサルサガムテープが演奏しました。

ダウン症の子どもたちはたたき出したら止まらないし、私が行くとミッキー、ミッキーと抱きついてきて、一緒にいるだけで仲間意識を実感させてくれます。ダウン症だけでなく障害を持った方々も参加しており、行くたびに非常に勉強になります。常にはできないのですが、障害者と触れ合うごとにいろいろ感じる場所があります。

ーハンディを持った人たちとの触れ合いを強く意識したのは。

吉野さん 70年代後半のゴダイゴで活動していた時に北海道八雲町の筋ジストロフィー専門の病院を訪れたのが最初です。メンバーを誘い何回か行って一緒に演奏し、患者さんだけでなく、療養所のスタッフや八雲の町の人たちとも親しくなりました。

何かものを渡すのに、健常者だったら相手が手を伸ばしてすんなり受け取ってくれるところを、筋ジスの患者の方々には、自分が近くに寄ってしっかり渡さなければなりません。最初はドキッとしました。細かいことにまで気を遣って接することが必要だということ

痛切に感じました。だから、こういう活動というのが大事だと思います。ただ言っているだけではダメだと思います。

――ゴダイゴやその後の活動への影響は。

吉野さん 基本的にゴダイゴはグループとして「心の解放」もテーマの一つです。心の領域である音楽で役に立つような要望があったり、耳にしたらできる限りお手伝いしようという気持ちはいつも持っていました。サルサガムテープの活動を通じて、東ちづるさんがやっている「Get In Touch」に参加しました。音楽をやっていると、心の病気にも気になります。音楽で癒やせることがたくさんあるのではないかと考えています。

――「心の解放」とは。

吉野さん 私が小さいころは、日本の警察官が米軍の若いMPにばかにされていた様子などを見ていて何かおかしいな、と思っていました。戦後の日本というのは皆心を閉ざしていたような気がしていました。黙々とやっていたでしょう。やっと開き始めたのが70年代からではないですか。もっと楽しい世界があって、心を開くような思いを伝えるためにゴダイゴを結成したのです。

言いたいことを言えない日本人をいっぱい見ている、自分もそうだったのが、アメリカに行ってきたら自分の意見を言わなければならないと思いました。日本の奥ゆかしいことも大事で、それぞれ認めなければなりません。簡単な言い方ですけど人それぞれを認めなさい、ということです。

――ハンディを持った人たちと接して「心の解放」が必要と思ったことは。

吉野さん 自分の中には障害者だから、というバリアはないのですが、歩きの遅いお年寄りを見たり、障害者と接している中で、自分がどうしたらいいかということを考え、人への配慮がもう少し必要だと感じています。

――今後、どのようなことをしていきますか。

吉野さん 変に政治的にアピールしていくのもおかしいし、自然にそういう思いを持ち続け、機会が与えられたときに発言していかなければいけないと思っています。ゴダイゴは日本人の意識革命を求めていたグループです。ゴダイゴのスペルはGODIEGOで、一般的にはGODIEGOの生きる、死ぬ、生きるという不死鳥／ネヴァー・ギブ・アップで通っていますが、深い意味ではGODで精神、EGOはエゴ＝肉体であり、それをI＝愛を持ってバランスを取るといった哲学的な意味を込めているのです。Iというのは自分でもあります。人間は精神と肉体のバランスが大事なことで、お相撲さんがよく言う心技体と同じように、それを忘れずに生きていくことが基本だと思っています。

――福祉関係では。

吉野さん 当面はサルサガムテープの活動を支援していくことです。そこからいろんなものが生まれてくるのではないかと思います。寛容という言葉をもっとアピールしていきたい。それから、アーティストの妻（ミニ吉野さん）が絵画から飛び出て、オブジェとかトータル的なアート表現をしています。彼女と共に音楽も映像も取り入れてさまざまなトータル・アートの表現ができたらいいな、と思って活動していきます。そうすると障害者や心の病気を持っている方々とどう付き合っていくか、という問題にも突き当たり、これからさらに踏み込んでいかなければならないかと思います。

音楽・芸術の領域というのは、まさしく心だと思います。私に託されているのは表現していくことの楽しさ、素晴らしさを伝えていくことだと思います。それと障害者の方たちから手紙をもらったりしているのですが、そういうことには答え、生活の一部としてできる範囲でつきあっていかなければならないと思っています。できる限りやるということですが、肉体的にも経済的にも余裕のある人が何をしていくかということが大きな問題です。過去へは感謝、未来へはこのぬくもりを届けたいと思っています。

みっきー・よしの 1951年生まれ。横浜市出身。中学時代からバンド活動を始め、68～70年グループサウンズ「ザ・ゴールデン・カップス」で活躍。71年米国バークリー音楽大に留学。76年タケカワユキヒデらと「ゴダイゴ」を結成、「ガンダーラ」など

のヒット曲を出す。休止後、音楽プロデュース、映画音楽など精力的な活動を展開。映画「スウィングガールズ」（04年）で日本アカデミー賞最優秀音楽賞、日本レコード大賞企画賞を受賞。



### 相模原障害者殺傷事件の植松聖被告が宮崎勤死刑囚について言及した手紙

篠田博之 | 月刊『創』編集長

ヤフーニュース 2017年8月14日

このところ頻繁に相模原障害者殺傷事件の植松聖被告と手紙のやりとりをしている。障害者19人を殺害するというあの凄惨な凶行に彼を突き動かしたものが、精神的疾病によるものなのか、あるいは極端な排外主義というべきある種の思想と考えるべきなのか、つまり彼は病気なのかそうでないのかという関心からだ。



### 事件から1年を経た津久井やまゆり園

前回アップした記事では、世間の多くの人たちは彼が精神的に崩壊し会話も成立しない人だと思っているかもしれないが、実際にはそうでもないと書いた（下記参照）。

<https://news.yahoo.co.jp/byline/shinodahirouyuki/20170804-00074151/>

### 〔獄中の植松聖被告から届いた手紙〕

それは最初に植松被告とやり取りし始めた時の感想なのだが、その後少しずつコミ

ュニケーションを交わしている今でも、彼がどういう人間であるのかは、よくわからない。

最近届いた植松被告からの手紙は、相模原障害者殺傷事件後1年を特集した発売中の月刊『創』9月号を送ったことへの返礼から始まっていた。

《先日は『創』9月号を差し入れていただきまして誠にありがとうございました。

多くの利権を壊す私の考えは世間に出ることは無いと半ば諦めておりましたので、『創』を読んだ時は手が震えてしまいました。》

この間、彼は自分の主張を書いた手紙を多くのマスコミに送っていた。その中で手紙の全文を掲載したのは『創』だけだったことに「手が震えてしまいました」というのだ。『創』も決して彼の思考を肯定してはいないし、それを批判的に分析するために掲載したので、そんなふうと言われると複雑な思いだが、これを読んで気になったのは、彼の「私の考えは世間に出ることは無いと半ば諦めておりました」という記述だ。

植松被告は昨年、「障害者は生きていく意味がない」などという妄想を周囲に語り、反発を受けるのを意に会することなく犯行に突き進んだのだが、少なくとも自分の考えが到底受け入れられるものではないという認識は持っていたわけだ。精神的な病いなのかどうか考えるうえで、彼が自分自身をどのくらい客観的に見れているかというのは重要な判断要素なのだが、少なくとも彼は自分の言動が世間の意に反しているという程度の認識は持っているわけだ。

植松被告の言動を見ると、どうやら精神的疾病により善悪の判断もつかないような状況とは違うようなのだが、では彼の昨年7月26日の津久井やまゆり園での信じがたい凶行をどう考えるべきなのか。彼の主張を優生思想、あるいは障害者を大量虐殺したナチスの思想と同じではないかとは、この間、指摘されていることだが、植松被告自身はその指摘をどう受け止めているのか。

その私の質問に、彼は8月2日付の手紙でこう答えてきた。

《第二次大戦前のドイツはひどい貧困に苦しんでおり貧富の差がユダヤ人を抹殺することにつながったと思いますが、心ある人間も殺す優生思想と私の主張はまるで違います。

赤ん坊も老人も含め全ての日本人に一人800万円の借金があります。戦争で人間が殺し合う前に、まず第一に心失者を抹殺するべきです。

とはいえ、1千兆円の借金も返済できる金額ではなく、戦争をすることでしか帳消しにできないのかもしれませんが。

ゴミ屋敷に暮らす者は周囲の迷惑を考えずにゴミを宝と主張します。客観的思考を破棄することで自身を正当化させております。》

わかったようなわからないような答えだが、私はそのナチスとの違いに言及したくだりの前のこの一節がむしろ気になった。私が『創』とともに拙著『ドキュメント死刑囚』を送ったことへの感想だ。

《同封してもらいました「ドキュメント死刑囚」を拝読させていただきました。宮崎勤に関して執行までに12年かかっているわけですが、1食300円として食費だけで12年間で432万円の血税が奪われております。

意思疎通がとれない者を認めることが、彼らのような胸クソの悪い化け者を世に生み出す原因の一つだと考えております。》

執行まで12年というのは彼の誤解で、私と宮崎死刑囚がつきあったのが12年間で、逮捕から数えれば執行まで20年近くになる。その間、血税が無駄に使われるわけだから「彼のような胸クソの悪い化け者」は早く死刑にするべきだという主張のようだ。

障害者殺害を唱える発想と全く同じなのだが、私が気になったというのは、宮崎死刑囚をもっと早く死刑執行すべきだったと主張する彼は、自分自身について一体どう考えているのだろうか、ということだ。彼に死刑が宣告される可能性が高いことは理解できているはずだと思うのだが、それについていったいどう考えているのか。そもそも拙著を送ったのは、彼が死刑を宣告された時にどんな状況に置かれどういう処遇を受けるか知っておいたほうがよいだろうという判断からだったのだが、どうも彼は自分をそれに重ねあわせて考えることをしていないようだ。

もちろん昨年、犯行前に衆院議長のもとへ届けた手紙で言及していたように、心神喪失による無罪を主張するという発想は持っている可能性はあるのだが、その点についていえば、宮崎死刑囚だって弁護側は一貫してそれを主張していたし、宮崎本人も精神鑑定の本を獄中で読んだりしていたからその知識は持っていた。にもかかわらず裁判ではその認識は一蹴されている。それを思うと、植松被告の宮崎死刑囚に対するこの言及は気になった。彼は死刑について、あるいは死についてどう考えているのか。次はそれを訊いてみたいと思う。

さて『創』誌上やウェブ上で植松被告の言動を紹介し、あの津久井やまゆり園での凄惨な大量殺りくがいったい何によって起こされたのか解明することが重要だ、と書いてきたことで、この間、多くの人から意見が寄せられている。前回の記事を発表したヤフーニュース個人やブログスにもいろいろなコメントがつけられているが、中には、もっと多くの精神科医や他の専門家の意見を紹介してほしい、という声もあった。

『創』9月号には、精神科医の松本俊彦さんと香山リカさんに、植松被告の最初の手紙を読んでもらってその感想を寄せてもらっている。松本医師は、今年の厚労省の検証チームのメンバーでもある。その二人の分析は、全文は長いので『創』を読んでいただくとして、ここでその要点のみ紹介しておこう。

香山さんも指摘しているが、植松被告の「悪魔的思考」と、社会全体が閉塞する中で「排外主義」が拡大していることとの関係は非常に気になるところだ。アメリカでレイシズムと批判されたトランプ大統領候補が当選を果たしたり、欧州で極右政党が躍進していることなど、排外主義が世界的に拡大しつつあり、日本でもそれはヘイトスピーチとして現れている。果たして植松被告の思考はそれと通底しているのかどうか。もしそれが通底しているとすれば、私たちはどうやってそれに抗すべきなのか。社会に突きつけられた課題は本当に思いと言わざるをえない。

#### ●松本俊彦〔精神科医〕

##### 植松被告の思想はヘイトというより優生思想

事件から1年が経過しても、彼の思想には何らのブレはなく、ある意味での一貫性があ



ります。このことから、彼の思想内容は、大麻による薬理学的影響によるものでもなければ、双極性状態（躁状態）によって影響されたものでもないことがわかります。

彼の思想は、生産性、効率性、社会的負担を判断基準とした、いわば「憂国の士による障害者無用論」と感じました。実際、手紙の中には、出生前診断の意義と限界に言及したともされる箇所もあります。その意味では、今年の殺傷事件を支える思想は、障害者に対する「憎悪（ヘイト）」というよりも、優生思想であるといえるでしょう。

### ●香山リカ〔精神科医〕

#### 1年たっても何の答えも出ていない

1年前の事件ではとくに被告には精神科病院に措置入院歴があり、マスコミがそれを求めたのは当然と言えますが、当時もそしていまこの書状を読んでも、彼の凶行の原因を“なんらかの精神疾患の症状”に求めるのはほとんど不可能ではないか、と思われる。誇大妄想や被害妄想、観念の奔逸、犯行を命じる幻聴の存在などはいずれもほぼ否定されるでしょう。

では、彼は精神医学の診断ガイドラインではどこにも分類されないで、“正常”と考えられるのでしょうか。もちろんそれはまったく違います。重度・重複障害者に「不幸の元である確信」を持ち、「意思疎通が取れない人間を安楽死」させよ、と言い切る被告は、私たちの社会の基本である人権の概念を根底から否定する、あえて言うならば“悪魔的思考”の持ち主です。

精神医学の枠内ではとらえきれない、私たちの社会を壊すような“悪魔的思考”やその実行に私たちはどう対処すべきか（あるいは、それは「内心の自由」なのだから対処すべきではないのか）。さらには、それを醸成するようないまの社会の排外主義的な空気をどう払拭すればよいのか。事件発生直後からクローズアップされてきたこれらの問題に、結局、1年後のいまもなんの答えも出ていない。そのことが改めて明らかになった思いがしました。 以上

### 相模原障害者施設殺傷事件・植松聖被告は内向的だけど目立ちたい「アンバランスな人間」 【THE 筆跡鑑定ファイル】

サイゾーウーマン 2017年8月10日

相模原市の障害者施設「津久井やまゆり園」で19人が刺殺、27人が負傷した事件から1年がたつ。植松聖被告は「手紙魔」でもあり、事件前に衆議院議長に手紙を渡そうとしており、事件後も複数のメディアに対し手紙を送っている。ここではその手紙に書かれていることではなく、手紙の「筆跡」に注目したい。筆跡鑑定人で、筆跡心理学に基づいた書籍『自分のイヤなところは直る！』（東邦出版）の著者、牧野秀美氏に植松被告の筆跡からその人物像を読み解いてもらった。

#### ■簡単なはずの字を間違えて書く心理とは？

——植松被告が事件前に送った手紙と事件後に送った手紙は、同じ人が書いたのだろうか？ と思うほど筆跡が異なるように、素人目には見えます。事件前の字は子どもが書くような字に見えますが、事件後は大人の字になっているというか。

牧野秀美氏（以下、牧野） 一見すると文字の形が異なっているように見えますが、両方とも本人の筆跡です。確かに事件前の横書きの筆跡は、拘置所で落ち着いて書かれた縦書きのものより、雑で稚拙な感じを受けますが、これはその時の精神状態の違いが大きいのではないかと考えられます。横書きの手紙を見ると、教員免許を持つ植松被告の文字は漢字が多く、誤字や脱字が見受けられません。しかし、非常に目立つ箇所



の「戦」の字を間違えています。

——ちょっと珍しい間違え方ですね。「戦」という字はよく見るので、間違えようがない気がします。

牧野 「自分は有能である」と懇懇にアピールしている植松被告にとって、小学生で習う単純な文字を間違うとは考えにくいことから、通常とは違う精神状態であったのではないか、例えば、これから事件を起こすことで、日本中から一斉に注目を浴びている自分の姿を想像し、精神が異常に高揚している状態などが考えられると思います。横書きと縦書きで特に違いが出ているのは「思」という字です。縦書きに比べ、横書きでは下の「心」という文字の左右の払いが短く、異なる感じを受けますよね。

——横書きだと、下の「心」の部分が、きゅっと縮こまっているような感じですね。縦書きは、心の部分が一気にのびのびしています。だから、違う人が書いた字のように見えてしまうんですね。

牧野 ただ、そのほかの特徴（かんむりの独特な形、へんをつくりの間の間隔、接筆部分が閉じている、角に丸みがあるなど）などは一致しています。横書きを見ると、文字を下部の罫線にぶつからないように書いていますよね。一方、縦書きで「思」などの文字の左右の払いが長いのは、下の罫線がないために、のびのびと書けた結果です。植松被告は、文字を罫線と交差させて書きたくない気質なのでしょう。縦書きにあるような、左右払いの長い形が本来の筆跡だと思われます。通常、残虐で暴力的な犯罪者は、衝動性を抑えられないものです。そのような気質は交差文字（異常接筆や線衝突）となって表れるものですが、植松被告の筆跡に、交差文字はほぼ見られません。何かの拍子で画線が交差した文字はいくつかありますが、安定的に交差文字が現れているわけではないようです。植松被告は、残虐な犯行を行っていますが、衝動的犯罪ではありません。

——以前、宮崎勤や酒鬼薔薇聖斗についても伺いましたが、犯行声明文の、内容を一切読まずとも、筆跡だけで、一見ゾワッとなるような感覚が、植松被告の文字にはないですね。筆跡自体は普通です。

牧野 植松被告は安全圏にいるわけです。自らに危害が及ぶような修羅場を乗り越える度胸はないということです。わかりやすく言えば、「弱い者いじめ」をする人間だということでしょう。また、「無」の字に見られるれっか（下の四つの点々）ですが、散開させず、すぼまったように書かれています。これは「明るく社会的にふるまうことが苦手な内向的な人」の書き方です。さらに「植」と「松」は、木への縦画の上部への突出があまりないことから、自分が矢面に立たず、人の後ろから様子をうかがう面もあるようです。一方で、縦書きの「思」の下の「心」の部分など、左右の払いは大きく払われています。これは「目立ちたい、スポットライトを浴びたい、自分の世界に没頭し、なりきる」といった、自己顕示欲につながる書き方です。

——以前鑑定した松居一代さんの筆跡は「すぼまる、縮こまる」とは一切無縁の、自信みなぎるダイナミックな筆跡でした。

牧野 植松被告は自分に自信がなく内向的であるのに、強烈な自己顕示欲はある。このような心のバランスの悪さを、コントロールできなかったのでしょう。また、ハネが弱いのですが、これは責任感の乏しさや、待つのが苦手であること、思考面も行動面も自分の型にはまっており、融通性が乏しいことが読み解けます。

——「自己顕示欲は強いのに自信がなくて内向的」な人って、ネット、特にSNS上でよく見かけますね。

牧野 ただ、誤解しないでもらいたいのですが、これらの特徴自体は、別に悪いことではありません。

考え方や行動面で融通が利かないのは、言葉を変えると生真面目で実直。ハネが弱い（=責任感がない）は、切り替えが速いともいえます。人によって、持っている気質は、良く出ることもあれば悪く出ることもあります。

——人の長所は、裏返せば、その人の短所でもありますよね。

牧野 はい。ですから、一概に筆跡の特徴で、善良な人や悪人が決められるわけではありません。その人の持つ価値観、生き方と筆跡の特徴の組み合わせによって、その人の行動が決まってくるわけです。植松被告は犯罪を実行すると自分で決めて、自身の持つ気質に沿った手口で、それを行ったのです。（石徹白未亜）

**牧野秀美** 筆跡鑑定人。筆跡アドバイザー・マスター。筆跡心理学をもとにした鑑定と診断を行う。著書に『自分のイヤなところは直る』（東邦出版）

## 娘の願い精霊船でかなえたい

長崎新聞 2017年8月15日

亡くなった向順子さんを思いながら手作りの「張り子」を精霊船に飾り付けていく利用者＝佐世保市、のびのび熊野



15日は県内各地で精霊流しがある。昨年11月に57歳で亡くなった佐世保市の向順子（むこうなおこ）さんは重度の知的障害を抱えながら乳がんと闘った。もう一度大好きな居場所に戻りたい。彼女の闘病の支えとなった介護事業所で、仲間や職員が飾り付けた精霊船はお盆の町へ繰り出す。

セミの鳴き声がにぎやかな10日午後。熊野町の障害者生活介護事業所「のびのび熊野」前に小さな精霊船が運び込まれた。次々に10～60代の利用者が集まってくる。その手には、色とりどりの折り紙を貼り付けたり、ペンで模様を描いたりした張り子があった。「なおさんに派手すぎて言われるかな」。職員と笑いながら楽しげに精霊船を彩った。

穏やかな楽道家で氷川きよしとハローキティが大好き。そんな順子さんがのびのび熊野と出会ったのは10年前。決められた作業を達成することが苦手で事業所を転々としていたころだった。通所後は年下の仲間に慕われ、一緒に料理を作ったり、実習でカラオケ店に行ったりする日々。弟の史郎さん（55）ら家族に届くアルバムには、見たことがない順子さんの笑顔があふれていた。

「胸がかゆい」。何げないことから乳がんが発覚し2年前の夏に右胸を全摘出。だが昨年9月に再発し入院生活を余儀なくされた。水がたまり腫れ上がっていく体。病状の深刻さは理解できなくても、体の異変を感じて「どうして私だけ」と落ち込むこともあった。それでも病室を訪ねてくれる仲間の姿を見ると表情は明るくなった。「家族だけだとしても暗い気持ちになる。皆さんのおかげで笑顔を見られる時間をもらった」。史郎さんは振り返る。

順子さんは、のびのび熊野に戻られるような治療を受ける直前に息を引き取った。「生前の願いをかなえて喜ばせたい」。史郎さんらは、のびのび熊野で飾り付けることを求めた。「なおさんがここを好きだったように私たちもなおさんが好きだった。できることをしようと思った」。受け入れたサービス管理責任者の筒井唯子さん（45）は話す。「障害を持つ人と心を通じ合わせるには正直に向き合うことが大切だと教えてくれた。戻りたいと思ってくれたことは誇り」

精霊船は家族で流す予定だが史郎さんにはある思いがある。「障害を持った人は手助けが必要。でもみんな愛らしくて幸せな気持ちをくれる。『みなさんよろしく』という気持ちでこの一風変わった船を引きたい」。作業を見守りながらほほ笑んだ。

## 巡回バスで注意呼びかけ 粕屋署、高齢者に詐欺など 読売新聞 2017年08月15日

警察官が公営のコミュニティーバスに乗車し、高齢の乗客らに「ニセ電話詐欺」や交通事故への注意を呼びかける県内初の取り組みを、粕屋署が始めた。座席の横に座って乗客

一人ひとりと対話することで、大人数を対象にした講話以上の効果が期待され、乗客からも「丁寧で分かりやすい」と好評を得ている。

「電話でお金の話をされたら詐欺だと思って相談してください」。宇美町が運営する福祉巡回バス「ハピネス号」の車内で10日、同署生活安全課の工藤璃子巡査が乗客の横に座り、優しい口調で語りかけた。

#### バス車内で詐欺への注意を呼びかける粕屋署員（右）

この日は、工藤巡査ら女性警察官3人が約2時間乗車し、約50人の高齢者一人ひとりに詐欺の手口を記したチラシなどを配りながら、注意を呼びかけた。乗客の男性（84）は「隣に座って同じ目線で話してもらえたので理解しやすかった。電話に注意したい」と話した。県警によると、電話でうその話を信じ込ませ、現金をだまし取るニセ電話詐欺の県内の被害は、今年上半期（1～6月）で前年同期比1.8倍の305件、被害額は1.4倍の5億761万円に上った。同署管内でも上半期で11件、962万円の被害が確認されており、被害者の多数を占める高齢者への啓発が喫緊の課題となっている。



同署は、公営コミュニティバスの利用者の多くが、地域の高齢者である点に着目。バスを運営する管内7町と協力し、活動を始めた。宇美町の担当者は、「警察官に身近な問題を相談する機会にもなるのでは」と期待する。取り組みは7月24日から始まり、今月10日までに14回実施された。

粕屋署の川崎寿久副署長は「一人ひとりと対話することで防犯や交通事故への注意がより伝わるはず。地域に根ざした地道な活動を続けたい」としている。

#### 来年から通訳ガイド自由化 訪日客増加、誰でも可能に 共同通信 2017年8月15日

政府は15日、5月に成立した改正通訳案内士法と改正旅行業法について、来年1月4日に施行することを閣議決定した。これまで国家資格の保有者に限られていた有料での通訳ガイドを自由化し、誰でもできるようにする。2020年東京五輪・パラリンピックに向け、急増する訪日外国人旅行者への対応が狙い。既に資格を持つガイドは「全国通訳案内士」を名乗れるようにする。5年に1度の研修を義務付けて質を維持し、資格を持たないガイドとの違いを出す。改正旅行業法は、旅行会社の依頼を受けてバスやガイド、宿泊の手配を代行する業者に登録制を導入するのが柱。

#### RSウイルス患者、昨年の5倍に 夏に異例の流行 共同通信 2017年8月15日

乳幼児の肺炎の一因になり、通常は冬を中心に流行する「RSウイルス感染症」の患者が大幅に増加し、8月6日までの1週間の患者数が昨年同時期の約5倍となっていることが15日、国立感染症研究所の調べで分かった。RSウイルス感染症は近年、流行が前倒しになる傾向にある。今年には既に流行期に入っているとみられ、専門家は注意を呼び掛けている。全国約3千カ所の小児科定点医療機関からの報告によると、今年の第31週（7月31日～8月6日）の患者数は4934人で、昨年同時期の1082人を大幅に上回った。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も

